

◎コラム◎

夢と文学・夢という語彙

— 還暦の月日を跨いで

稲賀敬二・稲賀繁美

一 六十年前の夢——「更級日記」随想

（前略）「夢はひとつの第二の人生である」と哲学的詩的小説「夢と人生」の冒頭に書きつけたフランス近代詩文の先駆者ネルヴァル（一八五五年歿）は、夢の氾濫のさなかに形成される心象を、夢見る者の受動性で受け容れ、それを目醒めた者の明晰さで静観し、そこに己れに固有な独自の世界を確立した。（…）日本でも古来、文学作品のなかで夢がはたす役割はおおきかった。勿論、比喩的な意味での夢ではないが、その一端は、「説話文学索引」の「夢」の項目を見ればすぐ合点がいくだろう。そこには数頁にわたって、上は

古事記から下は鎌倉時代に至るまでの説話にあらわれた夢の記述が、ぎっしりつまっている。（…）

五十余年の過去を回想して述べられる更級日記は、その形式に於いてすでに夢に近い。小説という文学形態は何より第一に時間的秩序のなかで継起する客観的現実像を、その因果的な展開にそって叙して行く。ところが、記憶を辿ってなされたこの日記では、時間はむしろ可逆的である。瞬間ごとになわねられて行く人間の生は、実はうしなわれたのではなく、我々の内部に確実な記憶として積み重なって行く。表面をあの無意識という、つれない仮面で覆われた底から、その無意識的な記憶が立ち返って来る時、人間は時間の鎖でつながれた世界から脱出することができる。五十余年のうしなわれた時の果てに立って、再び見出された時をあげわっている孝標女は、昔のある日と追憶にふける今との共通した広場のなかに、つまり追憶の封印のなかにある超時間の王国のなかに座っている。（…）

仏の身だけ六尺ばかりにて、金色に光り輝き給

ひて、御手片つ片をばひろげたるやうに、いま片つ方には印を作り給ひたるを、異人の目には見つけ奉らず。われ一人見奉るに、さすがにしみじくけ恐ろしければ、簾のもと近くよりも見え奉らねば、仏「さは、このたびは歸りて、後に迎へに来む」と宣ふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば十四日なり。この夢ばかりぞ、後の頼みとしける。

(天喜三年十月十三日、四十七歳の一夜の夢)

実はこうした非常に鮮明な夢の記述が、「夜半の寢覚」〔浜松中納言物語〕にも共通して度々あらわれることから、これらの作品の孝標女作とする伝説と相俟って、作者推定の重要な条件にまでされているのだが、それはさておき、この彌陀来迎の夢の彼方には、既に「往生要集」に示される源信の彼岸の世界が迫っているとも言えよう。(…)

個々の記事が、そしてそれを貫くものが、さらに日

記を書くという事それ自体さえもが、ひとつの夢であるこの作品は、また、これを読む者にも多くの夢を与えた。(…)
けれども人間を存在の根源へと誘う甘美な夢の旋律が、更級日記の中から見出され始めたのは、極めて近い過去である。人生を運命の神にもてあそばされた彼女の作品は、作者以上に数奇な運命の星の下に流転した。恐らく更級日記は新古今和歌集の編者藤原定家によって世に広められるまでは、極く少数の菅原家近親の人の目にしかふれなかつたであろう。なぜなら(…)
更級日記の名が最初に見えるのは定家の日記「明月記」に於てであり、定家の書写した更級日記が今日残っている。だが、それがいつの頃にか頁と頁とが綴りあやまられて、記事の続きはいかにも読み取り難いものとなつてしまった。大正末年その綴じのありやまりが復元されるまで、本居宣長のような学者まで「二部の大旨聞き難く思はる」と問う弟子の言葉に答えて、「身の上の事をそこはかたなくとびとびに書けるものにして何の趣意といふ事もなし；落窪、蜻蛉などよりは余程後なれば文章も劣れり」と評する始

末だったのである。いわば更級日記は著者の手を離れて後、約九百年、眠りについて、人に知られぬ夢を見つづけていた事になる。(後略)

(稲賀敬二「夢と文学」〔国語ゼミナール…夢の諸相〕「東大学生文化指導会、昭和二十八年(一九五三)六月号」より抜粋。肩書に「文学部国文教室」とある。①)

二 「夢と表象」 国際研究集會席上 での夢想——二〇二五年に

I have a dream. M・L・キング牧師の言葉として有名だが、この dream とは「将来に実現されるべき夢」を指す。いささか驚くべきことに、日本最大の『日本国語大辞典』を見ても、この dream の意味での「夢」の用例は、一九〇〇年以降のものしか採録がされていらない。それもわざわざ太宰治『人間失格』(一九四八)が引かれている。これは何を意味するののか?

冒頭の英語は聖書という文化的背景を暗示する。実際「将来への夢」には、理想世界の実現というキリスト教の終末論 eschatology が透けて見える。旧約聖書

に戻るならば、「vision なる民は滅ぶ」と英訳できる語句も想起されよう。Vision とは神による啓示としての「将来の夢」を指す。どうやらこの国只今の国語学や国語辞書の世界は、こうした聖書翻訳学の領分とは没交渉に陥っているようだ。そこまで確かめれば、逆に太宰治の用例の特異性も見えてくる。『人間失格』はいわゆる日本流の私小説というより、むしろ基督教世界の告解文学とみたほうが妥当しよう。『晩年』冒頭の「選ばれてあることの恍惚と不安ふたつ我にあり」はヴェルレーヌの翻案。「生まれてごめんさい」も、ヴァレリーの「善をなす場合には、いつも詫びながらしなければならぬ」の応用だった。太宰の心象世界は、実際にはフランス仕込みのカトリック信仰における罪の意識を日本の土壌に移植したものであり、そこで「将来の夢」は、実現不可能な否定の徴を帯びて析出した。

ロイヤル・タイラー訳の『源氏物語』明石の巻には、「おもかげ」に相当する言葉が三度登場する。そのうち一度は vision、二度は image と訳されていると

いう(荒木造)⁽²⁾。「おもかげ」とはおおよそ、その場にはもはや不在だが、その気配が想起されるという現象を指す。『万葉集』での同様の幾多の用例は、上代文学研究者、西郷信綱『古代人と夢』も説くとおり。だがそもそも「面影」という言葉は、西郷の師匠筋にあたる幻視者・折口信夫が「國文学の誕生」で注目した語彙だったはずだ。その折口に感化を受けた古生物研究者・解剖学者に三木成夫が居る。三木はクラゲス經由で折口の「おもかげ」をゲーテの原像 *Gemälde* と結びつけ、個体発生の胚の成長過程のうちに、古生物から現世生物に至る進化の歴史が「おもかげ」として投影されている——という魅力的な「夢想」を紡いでみせる。数億年の生物進化の歴史的身体記憶が、ちっぽけな胚発生のうちに圧縮されて発現するというのである。

こうしてみると、日本文学における「夢」の解析は、これを狭義の国語学や国文学の内部だけで遂行するのでは、いかにも不十分かつ危険なことが見えてくる。そもそも「夢」の概念規定そのものが、近代以降の欧

米語との交流のなかで変成を蒙り、国語国文学における探求の枠組みもまた、舶来学術との接触のなかで変貌を遂げた国学の姿を映している。折口は「のすたるじい」の典型を、上代文学の「おもかげ」に採り当てていたからである。

「夢想」とはルソーの『孤独な散歩者の夢想』でもあつて、昂進すれば白昼夢から幻覚にまで結びつく。だが『日本国語大辞典』の「ゆめ」の項は、ここでもこの語意の用例に欠く。その反面『集英社国語辞典』第三版は「幻視」に「医学用語」との注記をつけ *Visual hallucination* の英語を添えている(今野真二)。語彙論あるいは語彙史の立場からみれば、「幻視」などはたしかに「非歴史的」な「現代的」訳語に過ぎまい。だがこうした概念枠が一度術語として定着すれば、そこから時代を遡って、過去の文献に該当例を探ることとなる。「幻視」「幻覚」といった語彙は古代には不在だろうが、実例には事欠くまい。概念枠の網目と、呼応する隣接語彙群探しとは相互循環が発生する。容器と中身との馳こつこは、構造主義言語学のイロハである。

本邦の国語辞典は、何故かそうした方法論的反省を欠き、明治以降の外来語經由の概念枠の扱いに、なお習熟不全な欠落を温存しているようにも見うけられる。

(稲賀繁美「二夢」を巡る語彙のたゆたいを——夢想の方法論的反省にむけた覚書)『図書新聞』三三〇九〜三三二〇号、二〇一五年六月六日〜十三日掲載⁽³⁾

注

(1) 故・稲賀敬二(一九二八〜二〇〇二)・学生時代の若書きの随想「夢と文学」からの断片を、改題のうえ掲載する。息・稲賀繁美の責任で、抜粋のうえ、一部表記を改めた。本稿は『稲賀敬二コレクション』(笠間書院)全六巻には収録せず。全文は『稲賀敬二遺文集 明日何処ぞ迷い猫』(私家版、二〇〇三年)三六一〜四六頁に所収されている。なお、より学術的な記述は、『古典のあゆみ』(『図書新聞』昭和二十七年七月十四日)に、それ以前には「更級日記私見」(『校友會誌』) 廣島高等学校校友會第一号、昭和二十一年)がある。これらが著者の学問の出発点となった。

(2) 「夢と表象——その国際的・学際的研究展開の

可能性」(国際日本文化研究センター、二〇一五年三月一日〜三日、荒木浩教授主催)席上で発言し損なったコメントを、荒木浩先生のご高配により、備忘録として文章に残す。あくまで当日の発表をうけた即興の着想である。誤解などある場合には訂正してお詫びする。

(3) なお、山中康裕「更級日記」の中の夢に関する記述を「窓」とした三十代鬱病主婦について「魂と心の知の探究——心理臨床学と精神医学の間」創元社、二〇〇一年)がある。高い知的教養をもった日本語習得者の女性には、平安朝の文学に親しみ、孝標女の境涯、とりわけその夢の表象に自己を「うつす」ことで、自らの心的障壁を克服しようとする傾向の見られることが例証される。それは若き日の孝標女が自らを「源氏物語」のヒロインに自己同一化したようとした夢と、その後の実人生の反復でもあり、またそこには、夢による現実の補償作用というべきものの、顕著な発現例を認めることもできるであろう。